

売薬の意匠あれこれ

北多摩薬剤師会会長、立川市薬剤師会会長代行 平井 有(ひらい たもつ)

その5 ■ 舶来かぶれと片仮名

本シリーズでは5回目となる今号は、片仮名の商品名が多い薬の世界にあって、商品名やパッケージデザインで舶来品をイメージさせた売薬から、くすりの文化発掘の一端をご紹介します。

舶来とは、外国から舶(大型の船)に積んで来ること、また積んで来たもの、つまりは輸入品のこと、舶来品や舶来かぶれなどの言葉も生まれました。ご存知のように片仮名も平仮名も漢字から日本人が作ったものですが、数多くの日本人の発明の中でもこれらは日本文化の多様性と外国文化を寛容に受け入れるという特性が生み出した特筆すべき発明の一つだと思えます。明治時代、尋常小学校ではまず片仮名(ハトマメ、イヌ…)を教えました。戦後、平仮名が優先となった際に外来語、動植物の学名は片仮名で表記するとのルールが設けられました。しかしながら江戸時代から日本人には、片仮名の名称を使うと海の向こうから来た高級なもの、新しい考えという観念や先入観があるようです。

例えば江戸時代に売り出された下剤の一つに「ウルユス」という薬があります。これは緩下作用でお腹を空にする薬で、「空」という漢字を「ウ」と「ル」と「ユ」に分解し「ス」を足して、当時流行した蘭学、オランダ語に似せた名称のようです。

事ほど左様に現代においても、何をサポート出来るか? 様々なコンテンツを活用しつつ、リスクファクター管理も徹底しながら本来待っているポテンシャルを重視し、現状のモチベーションも見極めながらインセンティブを引き出しましょう。さらには周囲のコンセンサスも得た上でアプローチすることが、トータルケアを考えマネジメント化したルーチンワークに陥らないために非常に重要です。などと片仮名語、外来語をむやみに乱発する御仁もおられますが、今回は舶来品が珍重された時代の片仮名や横文字を駆使した売薬たちをご覧ください。



「ウルユス」

裏面に明治16年の印のある薬袋。上部にVLOYM VAN MITTRとあるが、どうやら綴りは正しくないようだ。左には「阿蘭陀国回斯篤児之奇方」とあり、蘭方医学を連想されるデザイン。



チミツシン
「Thymitussin」

田邊元三郎商店の鎮咳シロップ。パッケージのほとんどが横文字のデザインだが、瓶裏面に日本語で用法や用量等が書かれている。製品開発には後にエーザイを創設した内藤豊次氏が携わった。



「はれやか」

戦前に販売された頭痛薬。朱色の横文字「Hareyaka」はローマ字。小さく「原名HEITER」とあるがこれはドイツ語で「晴れ」という意味。中の薬包紙にも横文字があしらわれている。



「アール目薬」

戦前に東京で作られていた価格20銭の目薬。商品名、メーカー名、住所以外は横文字で書かれており簡素なパッケージもあいまって輸入品のような雰囲気を出している。



「塩加里散」

薬とは思えないおしゃれなパッケージのうがい薬(含嗽剤)。裏面に印紙が貼られていることから、明治15年(1882)から大正15年(1926)の間に作られた製品と思われる。